あれから12年…

札幌市医師会
東札幌メンタルクリニック　原　田　研　一

数日デスク上に放置していた道医師会からの封書を「なんだっけ、これ？」と思って開けてみると、文頭に「西年生まれ会員　各位」と書かれていた。あ～、そういうことか、もうそんな時期か。４回目の年男となる私のところに北海道医報恒例、新年号「新春随想」の原稿執筆依頼がやってきたのであった。３回目の年男の時にも同様の依頼が来たので、12年ぶり２回目のことである。図らずも「新春随想リピーター」になってしまった。まずはさておき12年間、大禍なく過ごすことができたことを嬉しく思う。

さて12年前と現在とで医師としての一番大きな変化は、勤務医から開業医になったことである。東札幌の地に小さな精神科診療所を開設して丸７年になろうとしている。約７年間、往く日も来る日も狭い診察室に籠りっきりになり、不動心ならぬ不動身であり続けた成果が、不意にビキッと首肩が固まったり、内臓脂肪を溜め込んだり、身体的ガタとして如実に現れている。そう言えば、白髪もちょっと増えたな。アンチエイジングとは無縁の加齢現象にされるがままの状態である。

「開業医は孤独だ」という言葉を先輩開業医から聞いたことがある。日々何十人もの患者さんとの会話を繰り返し、魂が幽体離脱して抜け殻状態となった身としては、私生活において必要以上に人と接する気になんかなれない。なので私の場合は「孤独だ」というより「孤独でいたい」と思ってしまうのが実情である。12年前に比して、生来の社交嫌い・人嫌いが輪をかけて強まったかもしれない。

当院開業とほぼ同時に発生・進行した事象が２つある。まず１つは第一子である娘の誕生（第一子で打ち止め）に伴う育児。40過ぎての初めての子ども、そして女の子ということで、可愛くてしかたない。ちょうど１歳の誕生日を迎えたその日から保育施設に預け始めたのだが、朝の診療前に娘を送って、夕方の診療終了後に娘を迎えにいくという生活が開業とほぼ同時に始まった。オムツ、着替え、昼寝用布団を抱えながら通勤し、甲斐甲斐しく娘の世話をする自分。父性というより予想外の母性の発露。おそらく当時の私は血中プロラクチン濃度が上がっていたことであろう。そして現在、娘は小学１年生であるが、あろうことか送迎が必要な学校に通うことになってしまった。ということで、診療前後の送迎がいまだに続いており、今現在で送迎生活７年目を迎えている（最低あと５年は続く…）。

開業とほぼ同時期に始まったことのもう１つは、北大ボクシング部の監督業。先代監督（私の１コ上の先輩）が急逝したため、札幌在住のOBということで私が監督という肩書を頂くこととなって、間もなく丸６年になる。仕事と育児の間隙を縫っての監督業なので、北大体育館にまで出向いて学生の定例練習に顔を出せるのはせいぜい月に１回程度だが、実技指導したり、大会の際には選手のセコンドに付いたり。その他に関係機関との連絡調整、各種手続きなどけっこう手間がかかって面倒である。ただ若々しい学生たちと接する機会というのは、思いのほかいい刺激となる。実技指導しているうちに気持ちが高ぶり、よせばいいのに学生とスパーリングをやったりなんかしてしまうこともある。「１ラウンドだけならまだ俺の方が強い」と日々うそぶいているが、どうやっても体力的に２ラウンドはもたない。とはいえ、普段あまり味わえない攻撃心、警戒心、恐怖心などによりノルアドレナリンをはじめとする脳内モノアミンが一斉に放出されていることであろう。それもまた血中プロラクチン濃度が上昇し、男性性を忘れかけていた中年おやじの脳みそにとっては良きスパイスとなっていよう。

最後に、12年前の新春随想でも趣味のオートバイに跨った写真を載せていただいたので、今回も同様にオートバイの写真を載せてもらいたい（12年前と同じオートバイです）。しかし最近なかなか乗る機会がないので、自分が写った写真がない。ということで、娘がドヤ顔でバイクに跨った写真を掲載していただけたら幸いである。

それではまた12年後の還暦の時に…。